

あがたい 縣居翁・賀茂真淵は郷土の誇り、日本の宝

ご挨拶

賀茂真淵翁遺徳顕彰会 会長 山下智之

賀茂翁家集の「夏歌」には次の歌があります。

賀茂祭

年ごとに けふの葵を かけまくも

かたじけなしや 賀茂の氏人

賀茂祭・・・京都では石清水祭、春日祭と共に三勅祭の一つで、「祭」といえば賀茂祭のことを指します。

かもたけつのみみこと

真淵は鴨武角身命を祭る賀茂神社を大変誇りに思っていて毎年、賀茂祭（葵祭）が開催されることを思い、賀茂神社の氏子たちにもながらもに有難く感謝の歌を詠みました。この祭りが終わると、田植えの季節を迎えます。

かみゑに早苗うゝるかた書けるを

いそぎでぞ さ苗はうゑむ 足びきの

やま時鳥 なきにしものを

皆で早苗を植えていると、ほととぎすが歓迎してくれます。そして

屏風に雨ふるに人多く早苗とる所

大御田の みなわもひぢも かきたれて

とるやさ苗ハ 我君の為

水田で農民がどろまみれになって、苗取りをしている様子を詠み、農民の生活や働く人々を思い、国中の平和な時間帯に心がはずみました。

賀茂真淵翁「生誕祭」

令和5年3月4日



縣居神社本殿にて生誕祭が行われました。その後、講師に賀茂真淵記念館の伊熊敬一先生を迎え、「賀茂真淵記念館の収蔵品から」を題目に貴重なお話を頂きました。

賀茂真淵翁を知ろう

(12) 荷田春満と浜松国学

江戸に出て後、居を転々とし、筆耕、家庭教師などをしながら生活のために辛酸を嘗めていた真淵でしたが、やがて、真淵の学識を理解する人がまわりに増えてきました。同郷の盲目の歌人小野古道が入門しました。村田春道のような富豪とも交渉を持つようになり、その子の春郷・春海が入門しました。弟子ができて来客も増え、生活が固まってきた真淵は、寛保二年（一七四三）二月、四十六歳で茅場（かやば）町に家を構えました。土地は、大岡越前守配下の与力加藤枝直に借りました。枝直は自

分の勉学と子の千陰の教育のために、真淵を地所の一角に招きました。（後に、村田春海と加藤千陰は歌会・文会を盛んに開き、江戸派歌人の双璧と称された。ともに県門四天王の一人。）真淵は、優れた人々との交渉によつて学問も磨かれ、いよいよ著述にとりかかりました。真淵四十四歳のとき浜松に帰省した旅を「岡部日記」としてまとめました。また、四十六歳の冬には「万葉集遠江歌考」、翌年には「百人一首古説」を著しました。

(13) 真淵 江戸に出る

「岡部日記」は、元文五年（一七四〇）四十四歳の閏七月八日江戸を発ち、同月十二日の夕方浜松に帰省、二か月の滞在後、九月十一日に浜松を立出、九月十七日に江戸に戻るまでの旅の様子を記した紀行文です。日記の初めに、「此の秋はいざなふ人さへあれば、いでや母をもをがみ、つま子はらからにもあはばやとて、後の七月八日つとめてたちいづづ」と、旅の目的を書いています。訪れた土地と歴史を結びつけた学識の深さに驚かされ、郷土への限らない愛着に心打たれます。菊川では『太平記』の一節を記し、掛川の日坂（日

記）には「新坂」では清少納言の『枕草子』や鴨長明の『発心集』から「このままの明神」について感慨深く述べています。「万葉集遠江歌考」は、真淵の万葉集の研究として最も早い時期の著作です。内容は、遠江で詠まれた歌や遠江出身の防人の歌など十八首についての解説です。たいへん緻密、丁寧な名文で記され、真淵の万葉集の研究の基となった著作と言えます。この歌考で、真淵は引馬野にほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに」の歌は郷土浜松で詠まれたものだとして断定しています。



『賀茂翁家集』に収録されている『岡部日記』



『万葉集遠江歌考』
【賀茂真淵記念館所蔵】

活動報告

縣居神社「例大祭」
令和四年十月三十日



理事一同で参列させていただきました。

縣居神社「新年祭」
令和五年元日



今年も「立志の丘」からきれいな初日の出を拝むことが出来ました。

賀茂真淵記念館 平常展

「賀茂真淵と国学者の個展研究」

令和5年5月25日～
令和5年9月24日
令和5年11月30日～
令和6年5月19日



詳しくは「賀茂真淵記念館」のホームページをご覧ください